

KANUMA NO MEISHO

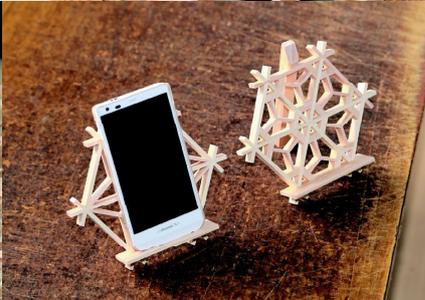
鹿沼の名匠



吉原 秀美

よしはら

ひでみ



吉原 秀美

吉原秀美さんは、弟の直幸さん、友也さんと3人そろって鹿沼の名匠に認定されました。父で師匠でもある幸二さんの下で修業を積み、栃木県伝統工芸士にも認定されています。

21歳のとき吉原木芸に入社するまでは、手伝い程度の関わりだった秀美さん。入社後、初めて簡単なものを完成させたとき、「工夫次第でさまざまなデザインを表現できる」と鹿沼組子の素晴らしさを改めて実感したそうです。

鹿沼組子は、木工のまち鹿沼を代表する工芸品の一つ。木の小片を無数に組み合わせ、麻の葉、胡麻柄、亀甲などの模様を作り出します。欄間、書院障子、つい立など主に和の建築に使われ、空間を引き締めます。

作業場で目を引くのは、特徴的なV字型の刃を持つ鉋。模様によって小片の形を変える必要があるため、V字の角度の異なる大小30以上の鉋を使い分け、小片の端に角度を付けていきます。

製作に当たり、最も重要なこととして3人が口をそろえるのが、一つ一つの小片の精度。わずかでもくるいがあると全体がゆがんでしまうため、木の収縮までも考慮しながら微調整を繰り返し、組み上げていきます。

磨き抜いた技術と経験が、鹿沼組子の美しい幾何学模様を生み出しています。和風建築が減っている中、鹿沼組子の良さを知ってもらうため、洋風の空間への提案や、携帯電話スタンド等の小物の開発にも取り組んでいます。

作業には一貫して高い精度が必要ですが、中でも、木の小片を削り端に角度を付ける「角取り」には特に細心の注意を払うと言います。今後の目標を、「海外にもPRしていきたい。販路の拡大だけでなく、製作実演などを通して鹿沼組子の魅力そのものを伝えたい」と話してくれました。

◆ 鹿沼組子製作

★ 鹿沼市